

多読術

映画文学人生論

松岡清剛 (1944-)

『多読術』2009) 「ちくまプリマー新書」

『松岡清剛 千夜千冊』』(2066) 「求龍堂」

『ちょっと本気な千夜千冊虎の巻』2007)) 「求龍堂」

参考：ヴァレリー『テスト氏』(1990) 粟津則雄訳

「福武書店」

本は二度以上読まないと言書じゃない

ウェブで松岡清剛『千夜千冊』の目次を見て世の中にはこんな読書家もいるのかと驚嘆した。第一夜から第六夜までの書名は次の通りだが、私を読んだことのある本は一冊もない。読みたいと思ふような本もない。

第一夜 中谷宇吉郎 雪

第二夜 ロード・ダンセーニ ペガーナの神々

第三夜 長尾雨山 中国書畫話

第四夜 ロジャー・ペンローズ 皇帝の新しい心

第五夜 河井寛次郎 火の誓い

第六夜 ジョナサン・グリーン 辞書の世界史

これでは、私を読んだことのある本や読みたいと思う本が『千夜千冊』にないかもしれないと不安になってくるが、さらに目次を見ていくと、第五十夜までに次の書名があるので、安心した。

第十二夜 ポール・ヴァレリー テスト氏

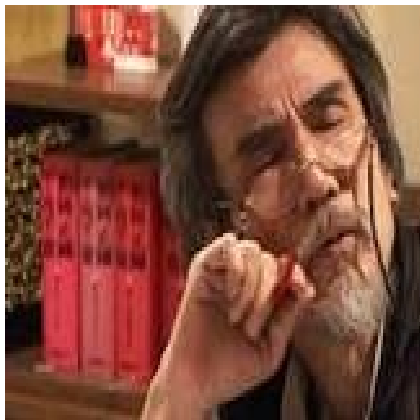
第十七夜 堀田善衛 定家明月記私抄

第二八夜 山本周五郎 虚空遍歴

第三一夜 中勘助 銀の匙

第四二夜 鴨長明 方丈記

五十冊のうちわずか五冊。しかも、気軽に読めそうもない書ばかりだが、これらの書なら私も



多読術

映画文学人生論

読みたいと思うし、すでに読んだ本もある。

それにしても『千夜千冊』の読書リストは私には謎だ。なにか謎ときのヒントがあるかもしれないという好奇心から、『多読術』を読んでみた。

第一夜の中谷宇吉郎『雪』からはじまって、最初のうちは、適当に読みやすかった本、感想を綴りやすい本ばかり選んだ。すごく感動したり、衝撃をうけても、それが何なのかよくわからないものもあるが、そういう本は避けていたという。

ところが、第十二夜になって、『テスト氏』が登場する。これは松岡清剛の青春時代に雷鳴をもたらした一冊らしい。さらに第十六夜の『虚空遍歴』は泣けて泣けてしようがなかった江戸時代の常磐津節の芸人で、最後は北陸にまでさまよって孤独のうちに死んでしまう男の話である。

つまり、松岡清剛に雷鳴をもたらした本は第十二夜、感動をもたらした本は第十六夜にやっと登場している。しかも、「本は二度以上読まない」と読書じゃない」という。彼は千夜千冊をすべて二度以上読んでいるのだ。

そして、『千夜千冊』を書いているうちに、自分の好みを発見し、読書リズムのようなものが、意外な深みのほうからすこし見えてきたという。世界と自分を見るにあたって必要なのは方法だけという『テスト氏』とあわせ、考えさせられる。

白魚や発句よみたき心かな 永井荷風

(第三六夜 加藤郁也『日本は俳句の国か』)